

昭和二十一年、夫は、かつての前歴のおかげで県警察官に復帰できた。そして二十二年二月間勤務し定年退職。今、夫は少しでもと公共の役に立ちたい気持ちで交通安全指導に奉仕している。

美佐子さんが、引揚者の労苦を表現する言葉並びに文字は、私の辞書にはありません。と涙をためて言われたのは忘れられない。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

義勇軍一中隊の帰国

岐阜県 青木 政憲

戦時の激動する最中、この大戦には是が非でも国難を克服して、世界平和の達成を念願して、すべてが国家総動員の状況で対戦されていた。

私たちもその一翼を担わんと志して故郷を遠く離れて祖国のために満州国の建設に満蒙開拓青少年義勇軍

として内地での基礎訓練を経て満州国開拓青年義勇隊員として、ハルビン訓練所に入所し、開拓の精神に燃えて奮闘していたが、戦局も悪化の方向になって、軍需生産の増強の対策に参加する使命のもとに、岐阜第四十四中隊田中中隊は二度にも渡る戦時勤勞挺身隊の派遣をよぎなくされて、奉天市の満州車両株式会社に勤務する立場となったが、荒地の開拓によって国家の建設はもとより、食糧の増産に寄与して、祖国の安定を信念を持って訓練に専念し、固く握りしめた鍬を軍需生産の目的遂行のためにハンマーに持ちかえての活動となったが、始めは慣れない動作で生傷の絶える時がなかった。

作業にもようやくなれ会社の方たちと肩を並べて、平常通りにできるようになって、期待に添えるものと奮起し始めたが、不幸にも敗戦という予期していなかった事態となってしまった。

逆にソ連共産主義国のモスクワ復興五か年計画の目的達成のために強制労働に利用され、四苦八苦の思いで、我に帰って気がつくとき、遠くハルビン訓練所中で

隊の留守居をしている仲間を思い婦参を願いたいところだが敗戦国の立場となつては、ただ怒りがこみあげてくるだけ、せめて連絡ぐらひはとれないものかと、訓練生皆さんは、顔を見合わせる度に話し会つていた。

しかし、暴動は収まらず、警戒を怠らなかつた。だが一部は訓練生は食うため満人部落に出入りして生活をしていただけで正確な情報は把握できない毎日であつた。ある日凛々しい顔つきでいつもとは変わった様子で朝礼のあいさつの際に中隊長は、

「ハルビン訓練所の留守隊員と連絡をとるため私は行く。この中から二人一緒に行つてもらふことにする」との言葉があつた。

隊員一同は顔を見合わせた。その指名を受けた訓練生は、私と山田君の二人であつた。私は何かで強くなぐられた思いがした。訓示が終わつて我々二人は本部屋に呼ばれた。二人はただ心配顔で中隊長室の戸を叩いた。中隊長から「よし、入れ」と返事があつた。今思うと本部の入口の敷居は高くて入りにくく、又あれほど肝を潰した場所もなかつた。

二人は部屋に入ると直立不動の姿勢となり、私が始めに「第四小隊第六内務班、青木政憲只今参りました」と申告して入り、山田君も同じように申告をして中隊長の前に立ち命令を待った。

中隊長はリュックサックと水筒を用意するように言われて、お金を私に確か三百円だと記憶しているが渡された。

山田君にも別に渡された。

「道中かなり危険があることを覚悟してくれ。また金は一番大切だから絶対盗まれることがあつてはならない。身から離すことのないよう良く注意して行くように」と強い指示があり連絡のためいろいろ書類を渡された。私は挺身隊にきている隊員の印鑑と、ハルビン訓練所で預金した隊員の通帳を預かつた、山田君も一部の書類と道中の食糧などを持った。早速申告を終えて部屋に戻り、リュックサックをよく点検し預かつた品物は確実に入れた。お金はここなら絶対に大丈夫と思われる襪の片隅に固く縫い付けた。

その夜は責任を感じて、なかなか眠れなかつた。朝

方ちかく寝付いたらしく夜の明けたのを知らなかった。

床から飛び出して外を眺めると、夏の太陽は周囲に照り付けかなり高く上がっていた。早速支度を終え山

田君を呼び、中隊長の部屋の戸を二人そろって叩いた。

中隊長と車両会社の幹部の方が完全な身支度で我々を待っておられた。念のために点検を受け異常のないことを確認できると、四人は挺身隊寮を後に奉天駅へと急いで向かって行った。時は昭和二十年九月二日であった。

駅には朝の七時半ごろ到着、辺りはいつもの様子と異なり、乗客、満人共は烏合の衆のように、プラットホームに出るのに我勝ちに先を争っていた。我々は前もって乗車券の用意が出来ていたので、早速群れの中心にだれ込んだ。駅では余り危険を感じることなく、思いのほか苦勞なしにハルビン方面行きの列車に乗り込むことができ、それに四人が座席に腰を下ろすことまでできた。この調子なら案内係に責任が果たせて楽しい旅行になるのではないかと思ひ四人は笑顔で語り始めた。道中は何しろ急いで南下するソ連軍の列車と

行き交うため、途中長く停車する時もあり、また駅などで予定よりも長く停車する場合があるので、車内は見ると見るうちに満員となってきた。

気がついて時計を見ると、正午は既に回っていることに気が付き用意してきた握り飯を食うことにした。

雲一つない良い天候で夏の太陽が列車の窓からこうこうと射し込み、汗と人の臭いとが一緒になって車内は何とも言いようのない空気であった。だからと言って勝手に降りることは許されず、止むなく空腹の悲しさでその場で広げた。なんだか変な味であったがたまたま夢中になって食べた。空腹が幾分満たされたなと思つたところ、だれかが「これはいけない。この握り飯はいかれていますぞ」と言って差し出した。三人は替わるがわる鼻先へ運んで悪くなっているのに気が付き、驚いてリュックサックの中を確かめると、上の方はたいして悪くなかったが、残念なことに重くなった下の握り飯は割ると糸を引き、完全に腐っており処分しなくてはならない。私たちは夕食のことを考えて心配顔で思案にくれたが何ともならない。しばらく呆然としていたが

中隊長は、「山田、やむを得んから窓から捨てろ」と命令が出たので、彼は列車の窓からリュックサックを逆にして捨てかけたが、底に貼付いてなかなか出ないの
で彼は二、三度上下に振った。すると一個の大きな玉
となって落ちた。いかにも白から出した餅でも捨てた
ようであった。見る見るうちに小さくなり四人は食糧
から見放されてしまった。

こうするうちにも一行を乗せた列車は目的地へと時
間を狂わせながらも向かっていた。列車の中へだれが
知らせてくれたものか、それともだれが聞いたのか
「ハルピンは暴動の最中だ」という大変なうわさが飛
び出し、列車はハルピンへは行かないというので、新
京駅で降りた。

新京駅に着いたのは午後六時の時刻は過ぎていた。
早速列車を降り中隊長は駅長室に行かれ事情を確かめ
られた。結果は大変に悪くひとまず宿をとることにし
て駅前の満鉄会館を訪れたが、閉まっております世話にな
ることが出来ず途方にくれた。

中隊長は再び駅長室に行かれ元気よく出て見えて先

に歩き始められた。目的は宿泊所であり、そのコース
は駅前の道路を真っ直ぐ五百メートルぐらい行き、右
へ回って二百メートル程行った右側の家であった。玄
関に向かつて見ると入口の扉は半ば閉じてあり、すぐ
入れそうな玄関ではなかったが、表札には引揚者援護
会敷島寮と記されてあった。

中に入ると階下は内蒙古から避難して来た人で一杯
で階段の通りだけが空いていたので、階上上がりや
れやれの思いで表側の一角を借りた。だが食事の時間
でも何一つ食い物はなく、ただ呆然として時を過ごし、
何だか気が抜けて元気がなくなっていた。

「一杯皆で飲もうか、オイお前たち行って買って来
い、酒を」ハイと返事をしたがお金はいつもの調子で
ポケットから容易に出すわけには行かず、ズボンとも
もひきを下げ褲を緩めて縫い入れた場所をほどかなく
ては取り出すわけにはゆかず、笑われながらも一苦勞
して取り出した。

「どれほど買って来ますか」と尋ねると「四合瓶一
本はいるだろう」と言われた。私と山田君はニタツと

して早速出かけた。「オイ行こか」と立ちかけるのを止めて「何か夕食の品でも一緒にそろえてこいよ」と念を押され二人は外に出たが、寮の前にはそれらしい売店はなく、あてもなく寮に來た反対の方向に歩いた。

少し行くと日本語で記された日本人経営の家に気がいたが残念ながら閉ざされていた。今の場合頼るのはこの家だけ、見付けられたがこの家の不運とばかり力一杯戸を叩いた。もちろん言葉はかけてのことである。しばらくすると中から返事があり私たちを知ると会っていただけた。事情を話して品物をそろえていただき急ぎ寮に戻った。

中隊長と車両会社の方は首を長くして待っておられたらしく、我々が階上に顔を出すと飛んでこられ「あったか、どれどれ」と言つて品物を受け取られた。他にまだ持っていたので「ありました、こんなに」渡していない品物を上に上げかけたが、他の避難民の方々がこちらへ向かれたのに気付き隠すようにして中隊長に渡した。

四人は四合瓶を囲んで中隊長から、順番に回して口

付けで飲んだ。空腹にしみる酒の味覚は何も分からなかったが、何とも言えない快い気分浸った。夕食を食べ終え一人二人と横になった。一行は一日の苦勞を忘れて何心配することなく一夜を無事すごした。

「オーイ起きろよ、朝だぞ」と中隊長は皆を起こした。私は何事が起きたのではないかと、目を覚まして見たが変わったことはなかった。ただ「早めにここを出て行かねば間に合わないかも知れないぞ、出かけよう」と言われた。着のみのままの睡眠であるので身支度には時間はかかることもなく、早速外に出て新駅に急いだ。

駅前の満鉄会館の塀の中ほどまで来ると、駅の方から始めに十五人ほどの満人の群れ、その後二十人程続いて我々の方に向かって歩いてきたが、よもや囲むことはなからうと我々は駅の方へ急いでいた。すると始めに通り過ぎた十五人の群れの中の二、三人が言いだした何事かの言葉で方向を替え我々の方へ向かってきた。それと通り掛かった群れも一緒になって向かってきて我々を完全に包囲してしまった。誰からともな

く暴力が加えられてきた。

この群衆では防ぎ切れず逃げる方向を捜さなくては生きられない、何とか逃れるため無我夢中で四人は戦った。満人の群れは腕力で我々の体にところかまわず暴力を加えてきた。

一人の大きな体の満人が後からリュックサックと背中の間に両手を入れ、私を抱き上げるようにしてリュックサックを取りあげかけた。取られてなるものと一生懸命戦ってみたが、かわるがわる加えてくる満人の暴力は阻止することが出来ず、止むなく力一杯体共々引くとリュックサックの首元の付け根が裂けてしまったので、下の方を固く握ったが、間もなくもぎ取られてしまった。取り戻さなくてはと力一杯反抗に出たが、大勢で抵抗が激しく、ほかの者に助勢してもらおうと思つてあたりを見回したが一人もおらなかつた。

呼ぶ声の方に目を向けると三人が満鉄会館の中に入つて手を振っているのに気が付いた。だがなかなか逃げる機会が無く仲間の者は呼びかえすだけで来てく

れない。そうするうちに運よく隙ができたので転がるようにして仲間の方にのがれた。

我々は痛む体をこすりながら避難を続けた。しばらくすると暴徒は一人二人と去り、日が射し始めたころは静かになってきたが、露店商人が店を並べる時刻になつてもまだ心配だったので駅に出るのを見合わせ、中隊長の行かれる方向に従つて再び歩いたが私には目的は分からなかつた。

しばらく行くと長屋と平屋の住宅を訪ねられた。言葉の合図を何回となく繰り返して待ったがなかなか扉を開けられない。内では何らかの音がしたので不在ではないことを知つてなお待ち続けた。ようやく扉を開け早速引き込むように中に入れると再び堅く扉を閉められた。

後で聞いたのだが中隊長の知人で、義勇隊訓練本部の訓練課長の渡辺氏でロシア語が達人なため、スパイではないのかと思われ追われておられたそうで、いわゆる戦争犯罪者としての疑いで手配を受けておられた身の上であつたらしい。ここで奉天に来ているたくさ

んの戦時勤労挺身隊は現在のところを絶対動かないよ
う伝える指示をうけた。この家では一時間ほどお世話
になり食事なども頂いた。

その後、新京駅に行ったが朝の時よりも暴徒が多く
とても構内に入って行くことができない。もちろん表
側からは乗車券を求めることは不可能であった。我々
は駅前の片隅でどうしたものかと迷い、あたりを眺め
ながら思案にくれた。「お前たちはここにいてくれ、
ちょっと行って見てくるから」と言い出すなり、中隊
長は一人駅の裏側から入って行かれた。しばらくして
戻ってこられたが顔色が変わっていた。

「ハルビンの日本人は全部牡丹江の方に連れ去られ
ようとしている。それに日本人を見つけて差し出す者
は、ソ連軍から何等かの報酬が与えられるとかで、日
本人は見付け次第捕らえられ送られているそうだ」と
聞かされて急いで戻って来られた。我々もそれを知っ
てからは寒気がした。

車両会社の方とよく相談され時期が悪いことに気付
くと、ここまでできて残念ではあるが持ち金も少なく

なったので一時奉天に戻ることにきめ、裏の方から駅
員にお願いして乗車券を頂きプラットホームに出た。

奉天方面行きの汽車は入っていたが客車に乗り込む
ことができなかった。反対側に貨物列車が停車してい
る。満人の暴徒にあおられてその貨物列車の方へ一歩
退り、二歩三歩と追いつめられてしまった。我々は再
び朝と同じようにこれまでと覚悟を決めた。

中隊長と私と山田君は全部取られて何一つ荷物を
持っていないかったが、車両会社の方が小さな荷物を大
切に持っておられた。荷物があつては自由に活動でき
ないと思われたのか足元に置き身構えをされた。する
と満人たちが一斉に笑い始めた。不思議に思い互いに
見合ったが何の変変わったこともない、ちょっと下を見
ると車両会社の方の足元に置いた荷物が、いつの間
か無くなっているのに気付いた。満人が一斉に笑った
のは、貨物列車の下からこっそり大切な荷物を盗んで
行くところを見ていて、それに気付かぬ我々の様子を
笑っていたことに感付いたが、だれだか分からないま
ま悔しさを押さえて満人共の顔をにらんでいただけで

あった。

出発時刻がきた。客が皆乗り終わるのを待つことなく列車は合図を終わると静かに動き始めた。この列車に乗らないといつ戻れるかわからない。満人などは列車の屋根の上などで大声をあげたり、なかには上で寝そべっている者も多く、我が物顔で常識など考えられない。後から後から先を争って乗り込む我々だけが列車の外であったが、列車はまだ静かに動いていてくれた。

「それ今だ、早く乗れ」空いた乗車口を見付けると何一つ持っていない我々は飛び込んだ。乗ってからは案内外でほっとした。車内においては胸がつまる思いで苦しい時が続いた。

陽が落ち温度が下がり始めたころになると悪臭も気にならなくなり、車内ではとうとうと寝付く者もでて無言の旅が続いた。途中ソ連兵を乗せた列車が優先するため長く停車する場合がたびたびあった。それと軍用列車と一緒に並んで停車した時、ソ連兵が我々の中になだれ込み、女性、時計、珍しい物品などを手あた

り次第に虐待、略奪するのには見るに忍びなかった。こうした場合にはたびたび遭遇したが力のない我々では手のほどこし方がなかった。

奉天駅に到着したのは午後十時を回っていた。

満人たちは列車から降りると改札口から早々に姿を消して行ったが、満人姿をしても日本人だけはいつまでもブラットホームに立っていた。数えて二百人ほどはいたと思う。その人たちは語れば言葉は通じ、中には涙を流し避難してここまで来た苦心談を語られる方々もおおられ、気の毒な日本人ばかりであった。よく見ると子供連れの方々も随分おられ全員男姿であったが胸の高い部分など隠しきれず、よくあれで来られたと思われる女の人もあった。

一同はブラットホームの中央に集団となり、身を低くして夜をすごす場を作ったが、夜が更けるにしたがつて寒くなり子供が泣きだした。泣き声が危険を呼ぶように感じられたが、仲間の二、三人の方が駅員にお願いして停車中の二両の客車を借り、朝まで車内で避難することになり我々も中に入って夜を過ごすこと

とし、まずはほっとした。

客車の両出入口の銃は堅く施錠し、やれやれの思いで静かな時が流れた。すると力のない子供の泣き声がしはじめたかと思うと一方で「泣かしては危険だ、泣かさないうようにしろ！」と叱る声が出て、一時は止まるがまた始まる。こんなことが二、三度ほど続いた。突然「ドンドン」と強く扉を叩く音がした。一同は水を打ったように静かになった。しばらくするとロシア語で何事かを言い出した。何を言っているのか全く分からない。皆も知らないせいか返事もしない。言い終わって何の返事もないと知ってか腹立ちまぎれか足で扉を強く叩いた。板が割れたらしく「メシイッ！」と音を立てた。立ち去るのかなと思っていたら銃の引き金の音が「カチッ」としたかと思うと「ドン」と車内に撃ちこんだ。続いてまた「カチッ」と音がした。我々は撃たれては大変と早速座席の下にもぐった。すると「ドン」と二発目が撃ち込まれたが、何の被害もなかったようであれ一人声を立てた者はなかった。

静かな時が流れはじめた。我々も座席の下から出て

座り、日中の疲れを覚えていつとなく眠りについてしまった。

「オイ起きろよ、早く起きろ」「眠たいな、はや朝なのか、まだ暗いのではないか」目をこすりながら起こした者の声の方に向いてよく見ると中隊長であった。ハッと気付くと一遍に目が覚めてしまった。山田君も気付いて服装を整えていた。

「少し早いが、早めに出た方が無事に行けるかも知れないから出かけよう」と中隊長が言われたので出口の方向に行きかけたが、閉ざされていることに気付く。「そこからは出れん。銃がかかっている。窓からしか出口はない。ここから出よう。さあ一人一人出た」と言いながら窓をあけた。四人は押し出されるようにして飛び出した。

まだ周囲は薄暗く雨が降ったので霞んでいてはつきり見えなかったが、慣れるにつれ次第に見えてきた。早速奉天駅の構外に出た。走っては怪しまれると思ひ、満人たちに気をつかいながら大股で急いだ。

駅前の小さな売店の裏側を通り広い道路を左に曲

がった。そのとき前方の建物の壊れている方を見ると、人が肌着だけの姿で倒れているのを見て、用心しなくてはと周囲を警戒しながら足を速めて進みかけると、突然三、四人の満人が我々に何事かを叫びながら指を差して向かって来るので一齐に駆け出した。

他の方からも声を聞いて駆け寄ってくる暴徒も目に付いた。

奉天駅を降りて皇姑屯の満州車両株式会社の方へ行くには、ガード下をくぐるか、何本かの線路を横断しなければ行けない。又ガード下の道路は両方から坂になっていて、雨降りの日など汚水の溜り場となってしまう所である。

暴徒がどんどん追いかけてくるので線路にとび上がり走ろうとしたら、ソ連の警備兵が自動小銃をこちらに向けて立っている。止むなくガードに向かって一心に走った。

ガードの下まで来て気付いたが、雨水が一杯溜っていてどうにもならないが、一刻を争うので考える余裕などなく、そのまま先頭である私は泥水の中に走り込

んだ。山田君も並んで走り込んだ。後の者のことは夢中で覚えていなかった。それに自分の体を守るのに一杯であった。

進むに従って水深は高くなり首に近づいてきたのでやむなく泳いだ。足の着いた場所から再び走り始め、ガード下をどうにか越した。続いて山田君が来た。後から聞きなれない人の声か泥水が出るころに「オーイ助けてくれ、助けてくれ」と声をかけてついて来た。

声を聞きわけるまでは満人ではないかと心配し、一生懸命に駆けしたが日本人だと知ってからは安心した。泥水から出て少し来た所でガードを見通して後方を見ると、満人たちは何事か言い合って手を振っているのが見えるだけで、一人として追って来る者の様子がない。安心して見回すと、中隊長が見えないので心配になった。

しかし追ってきた満人たちの方を見ても捕まった様子もなく、逃げられたことは確かであった。山田君と二人で注意深く周囲を見渡し捜しながら歩いた。両側は会社の塀が多く所々人家がまばらにあるだけだ。満

州精機工場の前までくると半開きの門から「オーイ青木イ、山田ア！ここにおるぞオ！」と急に呼ばれて驚いた。中隊長だった。うれしかった。顔が見えると二人は先を競って、工場の門へと急ぎ飛び込んで行った。朝の食事はまだ取っていないせいもあり、中隊長に会えたのと、知らない人とは言え日本人の家庭にいると思うだけであんだの気持ちで一杯となり、腹の空いたのに急に気付いた。食物をと思っていたら、家族の方が食べないかと親切にすすめて下さったので、言葉に甘えて食事を頂き本当にうれしかった。

この時ばかりは一時的にしろ祖国を思いだした。山田君と私は服装をお互いに眺め合った。泥水を吸った箇所から臭いが出て、お世話になった方々に申し訳なく思えてならなかった。いつまでもお邪魔するわけにはならないのでおいとまをしたが、一緒に出た満州車両の方の姿が見えないので心配したが、この地域には知り合いも多いことで、一時知人の家で待機されるであらうことを信じ、お世話になった宅を出た。そして満州車両へと向かった。道中は家屋は点々と並んで

建っているのだが、人影はなく不気味であった。三人は昨日までの恐ろしかったことをお互いに思い浮かべながら日中の暑い太陽をうけて帰途を急いだ。

間もなく満州車両会社の挺身隊寮の訓練生の待つ宿舎についた。中隊長の許可も出たので、早速自分の部屋へ行くと「ご苦労さん、よく生きて帰れたなあ」となぐさめてくれたその後から他の者が「おーい、臭い。ものすごく臭い」と言いだしたので「臭いのは俺だよ、駅のガードのそばで暴徒におそわれ、止むなく山田と一緒にガード下の泥水の溜っている所に飛び込んでその反対側に逃げた。死体が浮いていたのでその時の泥水の臭いだ」と言うと、そばにいた訓練生の一人が「わあたまらん、早く着替えろよ」と言って、代わりに衣服を投げってくれた。体を洗い清潔な下着を身につけた気持ちはなんととも言えない気分であった。

思えば奉天を出て新京へ行き、日本人狩りのためハルビンへ行けず、そして帰るまでの一週間は十数日のような気がした。その間生死の間を何度もさまよい、よくも帰れたものだとしみじみ思い話し合ったもの

だった。

十一月末満州もようやく治安がおさまってきたので、中隊長自らハルビン訓練所に赴きようやく連絡をとることが出来た。

我々奉天の満州車両会社に来ていた戦時勤労挺身隊は二十一年七月に帰国し、ハルビン訓練所の留守中隊は同年十月に帰国した。奉天組の死亡者はわずかであったが、ハルビン組は約三分の一が死亡し悲惨極まりなかった。

多くが農家の二、三男であった我々は、故郷へ帰っても住む家もないため、都市あるいは開拓地に働く口を求めて東京、名古屋、大阪及びその周辺あるいは北海道に散っていった。今は数年前に定年を迎えたが、その間満州時代の苦しかった経験を思い出し励ましている。

【執筆者の横顔】

青木氏は、昭和四年生まれで六十六歳をむかえたばかりの健康体は、みんなからうらやましがられている。

日本の国は資源が少ない、食糧も石油も鉄鉱も主たるものは外国から輸入しなければならぬ、この輸入を差し止められたら死ぬより外にない、この戦いは何が何でも勝たねば日本民族生きていけない、との信念を抱く青木氏は、当時、十五歳の紅顔の美少年のとき、けなげにも満蒙開拓青少年義勇軍に志し、昭和十九年二月二十四日、茨城県内原訓練所から出発し、満州ハルビンの大訓練所に入所し、晴耕雨読の学習と訓練の受講が始まった。

そんな時に、命令で青木氏は奉天の満州車両会社に戦時挺身隊として働き続けていた。二十年八月十五日、日本はソ連軍に無条件降伏したとき、青木氏らみなじたばたして悔恨の根深く号泣した。

その後九月二日、中隊長の命令で青木氏はハルビンの本隊に連絡のため派遣された、青木氏は三百円の大金を腹巻きの中に入れて奉天を出発、新京からハルビン行きを待った。その時日本人からハルビン行き止めろ、今、男の日本人一人のこらず牡丹江へ荷車で送られている。日本人刈りだ。その真実を聞き、ハルビン

行きをとりやめて奉天にもどった。この二週間は生死の境地をめぐり歩いたのである。

ようやく十一月末ころは治安は一応おさまったので、中隊長は自らハルビン大訓練所のあったところに着いて引揚げ準備にとりかかった。

青木氏らは奉天の満州車両会社のあった社屋で越冬して、お互いに給食のため牛馬の如き日常で労働を探して生きていた。昭和二十一年七月、コロ島から岐阜県関市のお家が家に引揚げるまでの苦勞を顧みるとき、引揚げられたのは青木一人の力ではない。全く神か仏か青木から離れず導いてくれたおかげです、と泣くのである。

引揚げてこれでも住む家がない、職はない。みな無いづくしである。あるのは満州から持参できた一千元だけである。家族をかかえている。青木氏は進んで下駄工場にお願いで労働者、山林地に入って伐採する。荷運搬する。のこぎりを引くなど何でもやる。

そうしたある日関市役所の採用試験で幸いにも採用されて以来三十二年間夢のように過ぎ定年退職した。

子供らがそれぞれ大学を出て家庭をもっている。

青木初老の夫婦は、どんなことがあっても戦争をしてはならないと、声をつまらせて語る。青木氏はいつの間にか習い覚えた、三味線を手には、得意の民謡を歌って社会福祉の施設や老人集会などに奉仕活動をして大変喜ばれている。

(世引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

青春の道程

愛知県 小林 保明

義勇軍志願

昭和十八年四月小学校最後の高等科二年となり、来年は卒業後の進路を決めなければならない。父は鉄道員になるのを希望していたようだった。ところが大東亜戦争も熾烈さを増して、一億国民総動員で、鬼畜米英撃ちてしまはん、欲しがりません勝つまではを合言